

# 新聞記事にみる 東京山の手河川と江戸城外濠

渡邊 翔太<sup>1</sup>・福井 恒明<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻  
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail: shota.watanabe.3b@stu.hosei.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科  
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail: fukui@hosei.ac.jp)

江戸城外濠は文化財でありながら水質汚濁や埋立てにより当時の歴史ある面影を失いつつある。外濠の再生の実現には時代背景や社会的扱いを把握することは重要である。筆者らは先行研究において新聞記事に着目し、外濠の社会的状況の変遷を調査した結果、戦後外濠を取り上げた新聞記事は殆ど見られないことを指摘したが、その原因は十分に解明できていない。本研究では河川を含む東京の水辺全体の社会的変遷を把握し、広域的な視点から外濠について考察することを試みる。その結果、外濠と対象河川では市区改正後や1930年代頃の水辺の散策道の整備などで共通する傾向が見られたが、戦後は共通する傾向は見られず、対象河川では水害、治水、水質汚濁という話題が共通していることを明らかにした。

キーワード: 河川, 水辺, 江戸城, 外濠, 新聞記事

## 1. はじめに

### (1) 研究背景

江戸城外濠は、江戸城の防衛のみならず内濠や東京湾、神田川、玉川上水と一体となって城下町江戸の貴重な水路・水空間・舟運路としての基盤であった。1636年の構築から約400年経った現在もその一部である約4kmが水面として維持されている。また、我が国最大規模を誇る江戸城の惣構えの旧態をしのぶことができることから、「史跡江戸城外濠跡」として1956年に文化財保護法に基づく文化財に指定された。しかしながら、関東大震災や第二次世界大戦後の瓦礫処理に伴う大部分の埋立て、首都高速道路用地への転用などが進み、残っていた水面についても下水流入に伴う汚濁や悪臭が問題となってきた。

江戸城外濠の保存活用についてはこれまで具体的な議論がされず、最低限の維持管理だけに留まっている。しかし最近では江戸城の歴史的価値だけでなく、都心の貴重なオープンスペースとして、水辺空間としての期待が高まりつつあり、具体的な行動を起こす動きも見られる。こうした動きを軌道に乗せるためには、地元・行政はもちろん、それを社会に伝えるメディアにも期待される役割が大きく、メディアへの情報掲載は社会的関心と強く関連すると考えられる。

筆者らは先行研究<sup>1)</sup>において新聞記事から江戸城外濠の社会的扱いや時代背景について把握した。その結果、戦後、外濠を取り上げた新聞記事は殆どないことを指摘

したが、その原因については十分に解明できていない。そこで本研究では河川を含む東京の水辺全体の社会的取り扱い、位置付けの傾向を把握し、広域的な視点から外濠について考察する。

### (2) 研究目的

本研究では、その時代の状況を反映するメディアとして新聞記事に着目する。水辺を取り扱った新聞記事の見出し、内容から河川およびその周辺での出来事を時代ごとに整理し、水辺をとりまく社会的状況の変遷について明らかにすることを目的とする。

## 2. 調査対象と研究方法

### (1) 調査対象

江戸城外濠と東京の代表的な中小河川として神田川、目黒川、石神井川を対象とする。

これらの河川は東京の山の手、武蔵野台地を水源として隅田川及び東京湾へ流れ、その流域は東京の近代化、都市化の中で大きく変貌してきた。このため各時代の社会的状況や社会的関心、人々と水辺の関係性を見る上で適した河川であるといえる。

また、江戸城外濠は江戸城外郭を取り囲む濠の総称であるが、著書や文脈によって神田川、日本橋川を含んで指す場合と現存する牛込濠から弁慶濠のみを指す場合が

ある。本研究では飯田濠から弁慶濠に至る西側部分を江戸城外濠として扱うこととする。

## (2) 研究方法

読売新聞<sup>2)</sup>および朝日新聞<sup>3)</sup>の2紙から江戸城外濠と神田川、目黒川、石神井川に関する記事を抽出する。抽出した記事を各河川別、年代別に整理し、その内容から各河川で共通する傾向、異なる傾向を把握する。考察にあたり行政資料、既存研究および文献等から外濠や東京の河川に関する時代背景を把握し、補足的に参照した。

## 3. 新聞記事の抽出と分類結果

新聞記事を抽出した結果、外濠189件、神田川1019件、目黒川439件、石神井川237件を対象とする。

### (1) 対象記事

読売新聞では「明治・大正・昭和1874～1989」の記事、朝日新聞は「朝日新聞縮刷版1879～1989」を用いる。この2紙を対象に、抽出する記事は江戸城外濠を指すワードとして「外濠」「外堀」「お濠」「お堀」を含むものとした。また河川においては各河川名（「神田川」「目黒川」「石神井川」）で抽出を行った。

### (2) 分類結果

抽出した記事に対し、年代別、記事内容別に分けて分析・考察を行った。記事の内容分類と抽出結果は表-1の通りである。抽出した記事を年代別に分析し、年代による記事内容の分類を行ったものを図-1～図-4にまとめた。

## 4. 年代ごとの考察

### (1) 1870年代・1880年代 一市区改正以前の河川一

神田川では市区改正以前から河川の浚渫や開削が行われている。「神田川の川底が埋まり、船頭たちが川ざらい願ひ出る（読売新聞1877.1.6）」や「神田川掘り割り工事（馬喰町一堀留町）着手（読売新聞1882.11.7）」からは市区改正前から舟運の利便のため浚渫や運河の新設が行われていたことが分かる。

目黒川は台風による河川の増水に関する記事で名前が挙がる程度であり、石神井川に関しては記事は一つも見られない。

### (2) 1890年代 一市区改正で改変が進む神田川一

1889年1月に市区改正条例が施行されると神田川では拡幅計画や橋梁の架け替え、浚渫の請負入札の広告が掲

表-1 河川ごとの記事分類

内容分類	外濠	神田川	目黒川	石神井川
改変	64	205	131	48
事件事故	60	361	164	66
利用	34	83	16	16
水質	14	133	63	28
様子	17	150	23	32
災害	0	87	42	47
総記事数	189	1019	439	237

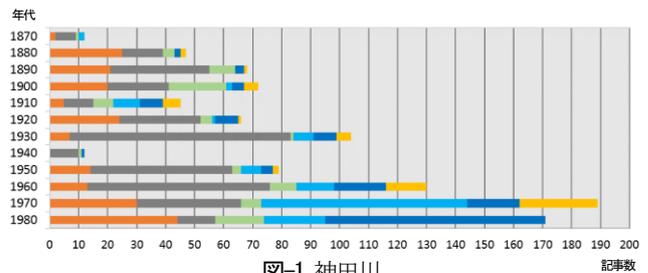


図-1 神田川

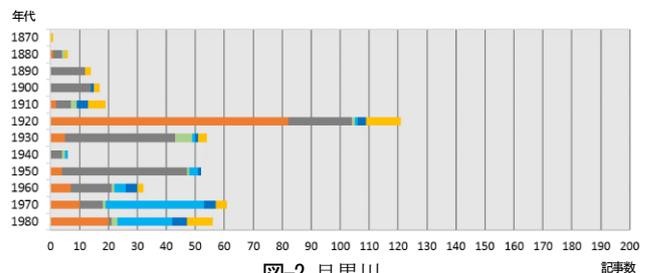


図-2 目黒川

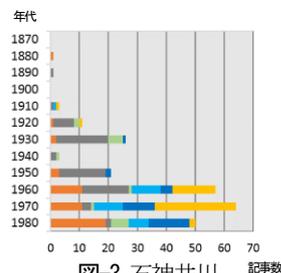


図-3 石神井川

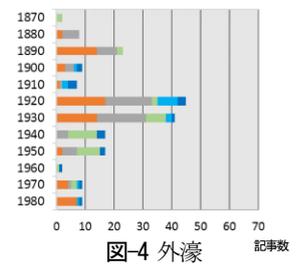


図-4 外濠

載されるようになる。また、日本鉄道の秋葉原延伸が本格化し頻繁に取り上げられている。「[雑報] 下谷鉄道の訓令違反に住民怒る▽新厩橋の完成、難工事で遅れる? (読売新聞1892.6.19)」では、鉄道延伸に伴い市内が分断されることを恐れた下谷区民が鉄道延伸に反対する様子が報じられている。秋葉原の貨物拠点には1892年7月に完成し、鉄道で運びこまれるものは東北方面の米が中心となり、神田川沿いは米問屋が立ち並ぶようになる。

このように、市区改正以降の神田川では河川の拡幅や開削、鉄道との接続により舟運の拡充が図られていった。

一方、目黒川では1890年代の記事は14件に留まり、転落事故や投身に関する記事が殆どである。また、石神井川は1890年代の記事は1件であり、市区改正後も状況は変わらなかったようである。

(3) 1900年代・1910年代 一市区改正の進行と水害の発生一

神田川では市区改正に伴う河川の改修や新設が継続して行われている。「三崎町の運河開削（東京朝日新聞1901.7.21）」では舟運の便を図るため神田川から外濠川への運河開削が可決されたことを報じている。このほか、河川の浚渫や護岸改修は予算案から計画、工事入札まで毎年のように取り上げられている。

また、1918年に富山から日本中に飛び火した米騒動は神田川沿いの米問屋にも影響し「営業税は月末迄 滞納者が夥しい 時節柄情状を酌量し 減税法も採用の覚悟（東京朝日新聞1920.6.16）」では、不況から神田川沿いの米問屋が納税できず次々と廃業に追い込まれる様子が報じられている。

1900年代以降は水害に関する記事も増えてくる。支流である千川（小石川）は度々氾濫しており「川尻になる程狭い千川 川が市を苦めるに非ず 市が川を苦しめて居る（東京朝日新聞1910.10.14）」では、頻繁に氾濫する千川に対し市が一向に腰を上げないことを批判している。なお、この頃はまだ山の手方面での水害の記事は見られない。

目黒川では水害の記事が7件見られ、いずれも大崎などの下流で発生していた。しかしながら河川改修に関する記事は見られず、記事の傾向は1890年代以前と変わらない。石神井川では水利組合が設立されたことが記事になっている以外は特にニュースは見られない。

(4) 1920年代・1930年代 一関東大震災から第二次世界大戦まで一

1923年9月1日に関東大震災が発生。1924年に帝都復興事業が開始されると神田川沿いでもその様子が取り上げられている。「新都二幅対ひぢり橋 変つた型で今から評判（東京朝日新聞1924.11.6）」では、聖橋の模型写真と共に「変わった形で今から評判」と取り上げられ、その期待感が表れている。また、1928年にはお茶の水橋も架け替えられている。「橋下には小公園 甦る市の溪谷名所 お茶の水橋架け換え（読売新聞1928.11.30）」

(図-5)では、「あまり現在のだと附近にある湯島聖堂その他歴史的由緒を傷つける事となり、さりとて古典的に過ぎては聖橋やニコライ堂との釣り合いが取れないという所から両者を巧みに折衷した所に設計者の苦心がある」との記述があり、設計者を評価している。このように、震災復興では周辺の景観や条件から慎重に設計されたことが分かる。

「市の水害防止事業 既に一部分工事に着手（東京朝日新聞1926.1.10）」では、千川を市外の石神井川に放流することに決定したと報じている。これ以降、千川で

見られた水害の記事は見られなくなる。一方で、「家屋川へ崩壊 母子3人間一髪難を逃れる 豪雨に浸水1万戸／東京・淀橋（読売新聞1934.11.3）」では神田川中流域の淀橋区の浸水被害を報じている。1935年にも同様に水害が発生しており、この頃から山の手方面の水害が取り上げられるようになる。

1930年代に入ると失業対策で河川改修を行った以外は浚渫や河川改修の記事は少ない。1930年3月に帝都復興事業が完成し、震災復興が一段落したためであると考えられる。

目黒川では、ようやく河川改修計画が浮上し、1920年に予算案が東京府会に出されたことが取り上げられる。しかしながら、河川改修はスムーズには進まなかったようで、「目黒川改修工事 財源の関係で遅延は免れぬ（東京朝日新聞1923.11.12）」では財源の不足から工事が進んでいないことが分かる。1924年9月には目黒川が氾濫し大水害が発生、その後「大崎町民二百府庁へ押掛く 目黒川改修陳情（東京朝日新聞1924.10.21）」では被災した市民200人が府会に押し掛けたことが報じられている。1925年以降になると移転の補償金に関する記事や、失業対策として工事が行われていること、水害の記事も減少することから工事が進行していったと考えられる。

石神井川では水源の一つである三宝寺池が府の水泳場として開設されたことが記事になっている（東京朝日新聞1920.8.4）。しかしながら「鉄箒／『悪水溜』（東京朝日新聞1920.8.20）」では「水はお汁粉のように濁っていて鯉でさえ窒息しそうな泥水である」と劣悪な様子



図-5 御茶ノ水橋架け替えを報じる記事（読売新聞 1928.11.30）

を伝え、水泳を楽しめる環境ではなかったようである。

石神井川では川遊びによる事故の記事も多い。「プールが誘う溺死の魔所 入場料を払えぬ子が泳ぐ 石神井川の遊泳禁止(読売新聞1930.6.23)」では、プールの入場料が勿体ないので附近の川で遊ぶ子供が多く、事故が多発していることを報じている。1930年代後半になると川沿いに散策道が整備されたことが取り上げられている(東京朝日新聞1937.6.29)。自然豊かな環境は東京近郊のハイキングコースとして親しまれてきたようである。また、1930年には石神井風致地区として石神井池とその周辺が指定されている。

#### (5) 1940年代 ー第二次世界大戦前後の河川ー

1940年代に入るといずれの河川の記事も殆ど見られない。僅かに掲載された記事も事件や転落事故といったものであり、この年代の記事から河川の状況は見えてこない。終戦後も同じ傾向である。

#### (6) 1950年代・1960年代 ー高度経済成長期の河川ー

1950年代に入ると各河川で再び記事が見られるようになる。

朝日新聞1951.9.22では「都内39河川で潮の干満に関係なく自由に航行できる河川は一つもない」と報じられており劣悪な状態を伝えている。その後「まず神田、外濠川を 都の浚渫工事始る(読売新聞1952.4.19)」では浚渫が始まったことが記事になっている。

一方で、舟運に影が出始めるのも同じ時期である。

「神田分場の拡張絶対反対 秋葉原船溜池問題・きょう町民大会(読売新聞1953.8.11)」、「都、地元の対立とけず 神田川入堀の埋立権・3者会談(読売新聞1954.8.26)」では使用されなくなった堀溜を埋立てる動きを報じている。物流が舟運から陸上輸送へ徐々に変化している表れであると考えられる。

1960年代に入ると台風が来る度に浸水の被害を伝える記事が増える。それと同時に治水に関する記事が増え、舟運に関連した河川改修の記事は見られなくなる。

「神田川の水害防止で決議文 新宿区議会(朝日新聞1966.7.6)」では、狩野川台風で甚大な被害が出たにも関わらず大した対策を講じず再び水害が起きたため、都の責任として新宿区議会が決議文を出したことを報じている。「少しの雨でも“山の手水害” 都市開発バラバラ▽新興住宅地水びたし(読売新聞1966.8.23)」では「上流の善福寺川などの流域の田畑が住宅地となり、急激に下流に水が流れるようになった」と書かれており、高度経済成長期の急速な都市化が水害を招いていることが分かる。

また、水質汚濁に関する記事も度々見られるようにな

り、「川ざらいよりゴミ処理を(読売新聞1961.10.7)」では、神田川沿いに住む学生の投書が当時の市民の川の扱いを伝えている。「各家庭では、台所のゴミからクズ紙にいたるまで神田川に捨てる人が多い。私が見ていて腹立たしく思うのは、近くの八百屋さんなどが三輪車で夜中に捨てに来ることだ」と書かれており、水質汚濁の原因は生活排水が流れ込むだけでなく、市民がゴミを直接的に投棄していたことも原因のようである。「神田川のドロ水にコイ・フナの大群 パトカーも出動大騒ぎ(朝日新聞1966.7.23)」では突然現れた魚群に群衆ができ、その整理にパトカーまでもが出動したことが記事になっている。今では考えられないが、魚がいるだけで人集りができ、ニュースになるほど河川の状況は酷かったことが分かる。

目黒川でも神田川と同様に水質の悪化を報じる記事が見られる。「[これは困る] ごみための川 鼻つまみの清流? 目黒川/東京(読売新聞1951.11.23)」(図-6)では「夜十時ぐらいにバケツでコソリ捨てに来るが、なかには白昼堂々捨てに来るものもある」と書かれ、市民が日常的にゴミを投棄していたことが分かる。1950年代後半になるとゴミが溜まり悪臭を放っていた河口付近の入り江を埋め立てて公園にする計画が報じられる。この場所は現在八ツ山通りと東八ツ山公園になっている。

石神井川でも河川汚濁と水害の記事がこの年代の大半を占めている。特に1960年代以降は水害に関する記事が多く、「台風26号 またもや人災浸水 怒りぶちまける住民 徹夜で自衛/東京(読売新聞1966.9.25)」では、中々進まない河川改修を前に沿川住民は水害の度に自衛に追われていたことが報じられている。



図-6 ごみで溢れる目黒川の様子  
(読売新聞 1951.11.23)

また、石神井川でも不法投棄が行われており、「これが無法バキュームカー 白昼、川へ泥水捨てる 地元民、怒りのシャッター (読売新聞1967.5.27) (図-7) では土木工事の泥土を石神井川へ捨てている様子が報じられている。この他、重油が流出したことも取り上げられており、当時の河川の扱われ方が見て取れる。

(7) 1970年代・1980年代 一深刻な水害と水質汚濁一

1970年代に入ると鯉や鮎の放流実験が度々行われるようになる (読売新聞1971.8.13, 読売新聞1972.8.1, 読売新聞1972.11.18) . しかしながら、このような活動の影で大量の廃油や基準を超える汚水が流れ込んだことも記事になっている (読売新聞1972.12.6, 朝日新聞1973.7.13, 読売新聞1973.8.30) . 河川に対する意識は大きく変わっていないと考えられる。

1970年代中頃になるとユスリカの大量発生が度々ニュースになる。ユスリカは富栄養化が進む河川で大量発生するが、有害物質が大量に流れる河川では発生せず、浄化がある程度進んだ河川で大量発生することがあり、「ユスリカが大発生 神田川流域 川の浄化で元気づく / 東京 (読売新聞1974.11.30)」の見出しからも水質の改善によりユスリカが大発生したことが分かる。上流部では「善福寺川に住みながら 放流ニシキゴイ、2世も

/ 東京都 (読売新聞1979.6.15)」として鯉が定着していることが報じられている。しかしながら、「コイ、多量に酸欠死 神田川、殺虫剤も影響か (読売新聞1974.5.24)」では、汚染された河川と殺虫剤の影響でコイが大量死したのではないかと伝えている。これ以降も鯉の大量死は度々取り上げられており (1976.6.12, 1978.6.17, 1980.8.19, 1984.7.30, 1985.7.23, 1986.6.24) , 水質は改善傾向にあっても魚が定着できる状況までは至っていないことが分かる。

水害に関する記事も多く取り上げられており、「水なし一転水攻め東京 またも人災、怒りの“告発” (読売新聞1972.7.13)」では、ダラダラ工事を人災として批判している。洪水は神田川、石神井川、目黒川だけでなく都内17の河川で発生、杉並、世田谷、板橋区など上流域で発生していることが報じられている。

1970年代後半になると、毎年のように襲われる水害に対して浸水地域の住民の怒りが紙面上に度々登場するようになる。「なぜ防げぬ都心の水害 “人災の証明だ” 都が災害救助措置 (読売新聞1979.5.16) (図-8) では、水害対策として進めている工事の工作物の影響で浸水被害が発生したことを厳しく追及した様子が取り上げられている。水害は人災であるといった内容の記事は70年代後半から80年代にかけて度々取り上げられており (1978.4.8, 1978.5.4, 1979.5.16, 1979.9.14, 1981.12.6) , 沿川地域では常に水害と隣り合わせであったことが読み取れる。「様変わり水害常襲地図 下町減り山の手続出 神田川の改修遅れ拍車 (朝日新聞1982.9.14)」では、江東区内の0m地帯で水害がほぼ無くなったのに対して、千代田、文京、新宿、杉並区等で毎年浸水被害が発生していることを報じており、新聞記事から水害発生地区の推移が見て取れる。1980年代になるとソフト面の取り組みについて取り上げられるよう



図-7 不法投棄するバキュームカー (読売新聞1967.5.27)



図-8 水害の原因を人災と報じる記事 (読売新聞1979.5.16)

になる。「想定図で水害ピタリ 東京消防庁 新宿区内の神田川周辺 浸水範囲、予測通り（朝日新聞 1982. 10. 26）」では、作成した浸水予想図が成果を上げたことが報じられており「今後このような図を他の地域にも広げていきたい」と書かれている。この他にも、ハザードマップを製作したことが記事になっており、ハード面に加えてソフト面の対策が進み始めたことが分かる。この他、1981年からは朝日新聞で「神田川」という連載が2か月に渡り東京版に掲載されている。「川だった」遺産を巡ることをテーマに町と人に焦点を当て、連載最後の記事では「私の神田川」と題して、沿川住民の思い出や清流復活への願いを取り上げている。

目黒川では工場排水の垂れ流しが度々取り上げられている。「工場汚水たれ流し許さぬぞ 排水口に“背番号” クリーン目黒川へ監視体制／東京（読売新聞 1975. 4. 20）」では、その対策として排水の監視体制を強めていることが報じられている。排水の問題は工場だけでなく沿川大学の理工学部の排水には水銀や鉛が含まれていることも記事になっている。1975年には「多摩川中流の水質悪化 支流からシアンも検出 目黒川トップ ついで綾瀬川（朝日新聞 1974. 5. 28）」という記事で東京一汚い川として取り上げられている。

一方で、水質浄化へ市民の取り組みも取り上げられるようになる。「中学生が汚れる川を追跡 目黒川の沿岸企業前に発表会（朝日新聞 1976. 6. 30）」、「「目黒川をきれいに」住民組織できる（朝日新聞 1976. 7. 24）」など、市民が河川の汚濁に対し行動を起こすことが取り上げられている。下水道整備や市民活動に伴い1970年代後半には水質はある程度改善したが、「目黒川を第2の玉川上水に 燃える流域住民 みんなで川底清掃＝見開き（読売新聞 1986. 9. 9）」では、上流部の田畑が宅地化、農業用水が主な水源である目黒川では流量が減った

ため、再び悪臭に悩まされていることが取り上げられている。

石神井川では水害に関する記事が目立ち、1970年代だけでも10回確認できる（1972. 7. 12, 1973. 9. 10, 1975. 10. 6, 1975. 11. 7, 1976. 9. 10, 1977. 3. 31, 1977. 8. 19, 1978. 4. 7, 1978. 5. 12, 1979. 5. 15）。「水攻め、足止め、竜巻 「胸まで水がきた」 板橋・大谷口北町で＝見開き（読売新聞 1978. 4. 7）」では洪水の原因を1976年完成予定として進められている河川改修の大幅な遅れであると報じている。

1980年代になると水害に関する記事は減り、河川改修が進むとそれに対する記事も登場する。「練馬の石神井川改修 コンクリート底ダメ 区議超党派で独自案作る（朝日新聞 1985. 12. 7）」では、進められている河川改修計画に対し「この計画は雨水をじゃまものにして、川とは無縁のコンクリートの箱の中に詰め込もうとしている。雨水は大地に返そう」と報じており、コンクリート3面張りの河川整備を批判している。

## (8) まとめ

年代別の分析結果を表-2にまとめた。

第二次世界大戦まで各河川の新新聞記事は相違した傾向を示している。神田川では神田川では古くから舟運が盛んで、市区改正以前より河川整備が行われていた。目黒川では1920年以降水害に関する記事が多く、対策として河川改修が計画され、その経過が多く取り上げられている。石神井川では子供たちが河川で泳ぐ様子や三宝寺池の水泳場開設、また川沿い散策道の整備が報じられ、自然豊かな環境であったことが想像される。

目黒川と石神井川では1920年ごろまで記事が少ない。両河川で記事が増えるのは1932年の東京市編入前後であり、この頃から沿川人口が増えたことで記事数も増加

表-2 各年代別の記事の傾向

年代	外濠	神田川	目黒川	石神井川
1870 1880	・釣りの禁止や魚の擁護など、禁漁の風潮が残っている	・浚渫の要望 ・浚渫工事、護岸工事、浜町川の開削	・河川増水の記事（被害なし）	
1890 1900 1910	・市区改正に伴う濠の埋立・浚渫 ・水質の汚濁を取り上げ始める	・市区改正に伴う河川拡幅、浚渫、護岸整備 ・鉄道の延伸と舟運拠点整備 ・水害（神田川小石川合流部）	・度重なる水害	・水利組合の設置
1920 1930	・水質浄化計画の浮上 ・外濠公園計画の具体化	・震災復興に伴う橋梁の架橋、河川改修 ・水害対策の開始 ・水質汚濁を取り上げ始める	・度重なる水害 ・河川改修計画浮上、予算をめぐる議論 ・ヨット選手権大会開催 ・河川改修開始	・三宝寺池水泳場の開設 ・石神井川での遊泳 ・川沿い散策道の計画と整備
1940 戦中 戦後	・お濠での鯉の養殖等による食糧増産 ・外濠川の埋め立て	殆ど記事無し	殆ど記事無し	殆ど記事無し
1950 1960	・弁慶濠でのホタル狩りやポート場といった水面の利活用 ※60年代殆ど記事無し	・舟運のための河川改修、浚渫 ・堀留の埋め立て ・山の手水害の記事が取り上げられるようになる ・深刻な河川汚濁	・目黒川下流埋め立て計画 ・河川改修 ・河川汚濁に関する記事 ・水害	・河川汚濁 ・度重なる水害 ・重油やバキュームカーの不法投棄 ・河川改修の計画
1970 1980	・飯田濠の埋め立て	・東京都の治水工事遅れを批判する記事 ・河川汚濁と改善へ向けた取り組み ・度重なる水害 ・水害対策の進行（ソフト対策の登場）	・河川汚濁と改善へ向けた取り組み ・大規模河川改修 ・度重なる水害と治水 ・水質浄化に関する記事	・度重なる水害 ・河川汚濁と水質浄化 ・水害対策と緊急河川整備

したと考えられる。

戦後は各河川で概ね同じ傾向を示している。

特に1960年代以降の記事は水質の悪化と水害が殆どである。水害は戦前も神田川や目黒川の下流部で発生していたが、戦後の記事では中～上流部で発生している。また、河川の汚濁は各河川で注目されており、下水の未整備と市民の直接的なゴミの投棄が原因であったと考えられる。1960年代以降の新聞記事は水害、治水、水質汚濁に関連する記事が大半であり、1980年代にかけても各河川で同じような記事傾向であった。

## 5. 外濠との比較

### (1) 戦前

市区改正以前の外濠では濠の改修等の記事は見られず、釣りの禁止や魚の擁護などを報じる記事が見られ、殺生禁止の慣習が残っていた。神田川では河川整備や浚渫、鉄道との接続が行われ、舟運の利便を図る記事が多くみられる。

市区改正を迎えると神田川では浚渫や護岸の改修を報

じる記事が増加する。外濠でも市区改正事業として濠の浚渫や補修が行われ、それを報じる記事が多く見られる。目黒川や石神井川では市区改正に関連した記事は見られない。

1920年代に入ると外濠では「外濠二周競争（読売新聞1921.2.25）」や「外濠の観月船遊（読売新聞1922.8.2）」としてボート遊びの様子を報じる記事が見られ、濠やその周辺でのレクリエーション活動の兆しがある。また、濠を埋立てて公園にする計画が取り上げられる。公園化計画と同時に水質浄化の計画も取り上げられ、一部は具体的な動きもみられた。外濠では1920～1930年代にかけて記事数が最も多い。

神田川でも1930年代から河川の水質に関する記事が見られるようになるが水質改善を報じる記事は見られない。目黒川では1920年頃から記事が増え始める。主に河川改修に関する記事で、大崎周辺では毎年のように水害の被害に遭っていた。石神井川では水質問題や川の改修の記事は見られず、川で泳ぐ子供の様子や川沿い散策道の整備が報じられている。散策道は完成後ハイキングコースとして紹介されている。外濠公園でも同様にハイキングコースとして紹介されており、どちらも市民のレクリエーションの空間として機能していたと考えられる。

### (2) 戦中

戦時下の外濠では濠が養殖場として活用されていた。

「外濠に鯉を5万尾 これは「空地」の利用法▽市民に開放（読売新聞1941.5.9）」では、外濠を「空地」と表現し、この空地を活かして鯉の養殖が行われていたことが報じられている。読売新聞1944.4.13の記事では「都下御料地約6700坪御貸下げ」（図-9）という見出しも見られ、他の水辺とは異なる存在であることが分かる。

一方、3河川では投身や事故の記事が僅かに見られるだけである。

### (3) 戦後

外濠では1950年以降、弁慶濠でホテル狩りやボート場の整備が行われたことが取り上げられている。ホテル狩りは1956年まで毎年のように取り上げられているが、これ以降、外濠での利活用を報じる記事は見られない。また、1954年には飯田濠埋立ての計画が取り上げられる。神田川でも同じ時期に秋葉原の堀留や浜田川の埋立てが報じられている。読売新聞1953.8.11では「陸上交通の発展にともない最近では全然使われずかえってドロゴミの捨場となってしまった」と報じられ、舟運から陸上交通に変化する過程で不要な水面が埋め立てられていることが分かる。

1960年代になると外濠を取り上げる記事は殆ど見ら



図-9 外濠の養殖場化を報じる記事（読売新聞1944.4.13）

れなくなる。一方、神田川、目黒川、石神井川では上流部を中心に水害に襲われていることが頻繁に取り上げられる。また河川汚濁も深刻な状況が度々報じられている。1970年代でも同じ傾向が見られ、水害、治水、河川汚濁という3つの話題が記事の過半数を占めている。1970年代後半から1980年代にかけて外濠では飯田濠の埋立てに関する記事が取り上げられるが、それ以外の内容の記事は殆ど見られない。神田川、石神井川では1970年代の記事数が最も多く、外濠とは対象的である。

#### (4) まとめ

外濠と神田川では1880年代を境に記事が増えている。どちらも市区改正に伴う浚渫や護岸の改修が行われた記事が見られ、共通した傾向と言える。外濠では3河川よりも早い時期から水質汚濁問題を取り上げている。神田川でも1930年代に水質に関する記事は確認できるが、具体的な改善策は見られない。目黒川と石神井川で水質を問題視するようになるのは戦後のことである。

石神井川では沿川を散策道として整備し、ハイキングコースとして紹介された。外濠公園も同様に「外濠ハイク」として紹介され、水辺は市民のレクリエーションの場として機能していた。

戦中、外濠では食用鯉の養殖場として利用されたとの記事がある。一方、3河川では記事は殆ど見られない。

戦後、外濠では飯田濠の埋め立ての記事が目立つ以外は殆ど見られないが、3河川では記事数が急増している。記事の大半は水害、治水、水質汚濁に関する記事であり、目黒川を除く2つの河川では1970年代の記事数が最も多い。

## 5. 結論

### (1) 結論

東京の代表的な中小河川である神田川、目黒川、石神井川を対象に新聞記事の分析を行い、3河川の分析結果と江戸城外濠を比較し、考察を行った。

その結果、戦前は各河川ごとに記事の傾向に特徴が出ていたが、戦後は水害、治水、水質汚濁という話題が3河川で共通であった。また、戦前は外濠と3河川で市区改正後の動きや1930年代頃の水辺の散策道の整備などが一部共通していたが、戦中、3河川を取り上げた記事は殆ど見られず、水辺の活用が見られるのは外濠だけであり、見出しの表現から他の水辺とは異なる存在であった。戦後は外濠と3河川で共通する傾向は見られない結果となった。

### (2) 今後の課題

#### 戦後の外濠の記事数の原因解明

1960年代以降、外濠では記事数が大幅に減少し、飯田濠の埋め立て以外の記事は見られない。この原因として今回の研究結果から、水害や過度な水質汚濁が発生しにくい外濠よりも、周辺河川の環境悪化の方が深刻であり、外濠への注目度は低かったのではないかと推察する。

この原因を明確にするためには、外濠周辺と3河川流域の下水道の整備や沿川の宅地化の過程を調べる必要がある。

#### 参考文献

- 1) 渡邊 翔太, 福井 恒明: 明治・大正・昭和期の新聞記事にみる江戸城外濠・内濠, 景観・デザイン研究講演集 No. 11 pp22-26, 2015
- 2) 読売新聞: ヨミダス歴史館「明治・大正・昭和1874～1989」, <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 3) 朝日新聞: 聞蔵II ビジュアル「朝日新聞縮刷版1879～1989」, <https://database.asahi.com/library2/login/login.php>